

貧しき信徒

八木重吉

青空文庫

母の瞳

ゆうぐれ

瞳をひらけば

ふるさとの母うえもまた

とおくみひとみをひらきたまいて

かわゆきものよといたもうこちするなり

お月見

月に照らされると

月のひかりに

こころがうたれて

芋の洗ったのや

すすきや豆腐をならべたくなる

お月見だお月見だとさわぎたくなる

花がふつてくると思う

花がふつてくると思う

花がふつてくるとおもふ

このてのひらにうけとろうとおもふ

涙

つまらないから

あかるい陽のなかにたつてなみだを

ながしていた

秋

こころがたかぶつてくる

わたしが花のそばへいつて咲けといえは
花がひらくとおもわれてくる

光

ひかりとあそびたい

わらったり

哭いたり

つきとばしあったりしてあそびたい

母をおもう

けしきが

あかるくなつてきた

母をつれて

てくてくあるきたくなつた

母はきつと

重吉よ重吉よといくどでもはなしかけるだろう

風が鳴る

とうもろこしに風が鳴る

死ねよと 鳴る

死ねよとなる

死んでゆこうとおもう

こどもが病む

こどもが せきをする

このせきを癒そうとおもうだけになる

じぶんの顔が

巨きな顔になったような気がして

こどもの上に掩いかぶさろうとする

ひびいてゆこう

おおぞらを

びんびんと ひびいてゆこう

美しくすてる

菊の芽をとり

きくの芽をすてる
うつくしくすてる

美しくみる

わたしの

かたわらにたち

わたしをみる

美しくみる

路

路をみれば

こころ おどる

かなかな

かなかなが 鳴く

こころは

むらがりおこり

やがて すべられて

ひたすらに 幼く 澄む

山吹

山吹を おもえば

水のごとし

ある日

こころ

うつくしき日は

やぶれたるを

やぶれたりとなせど
かなしからず

妻を よび

児をよびて

かたりたわむる

憎しみ

にくしみに

花さけば

こころ おどらん

夜

夜になると

からだも心もしずまってくる

花のようなものをみつめて無造作にすわっている

日が沈む

日はあかるいなかへ沈んではゆくが

みている私の胸をうってしずんでゆく

果物

秋になると

果物はなにもかも忘れてしまって

うっとり現実のつてゆくらしい

壁

秋だ

草はすつかり色づいた

壁のところへいつて

じぶんのきもちにききいつていたい

赤い寝衣

湯あがりの桃子は赤いねまきを着て

おしゃべりしながら

ふとんのあたりを跳ねまわっていた

まっ赤なからだの上したへ手と足とがとびだして

くるつときりよりのいい顔をのせ

ひよこひよこおどっていたが
もうしずかな障子のそばへねむっている

私

ながいこと病んでいて
ふと非常に気持がよいので
人の見てないところでふざけてみた

奇蹟

癩病の男が

基督のところへ来て拜んでいる

旦那

おめえ様が癒してやってくれべいとせえ思やあ

わしの病氣やすぐ癒りまさあ

旦那なおしておくんせい

拝むから 旦那 癒してやつておくんせい 旦那

基督は悲しいお顔をなさつた

そしてその男のからだへさわつて

よし さあ潔くなれ

とお言いになると

見ているまに癩病が癒つた

花

おとなしくして居ると

花花が咲くのねって 桃子が言う

冬

木に眼が生って人を見ている

不思議

こころが美しくなると

そこいらが

明るく かるげになってくる

どんな不思議がうまれても

おどろかないとおもえてくる

はやく

不思議がうまればいいなあとおもえてくる

人形

ねころんでいたらば

うまのりになつていた桃子が

そつとせなかへ人形をのせていつてしまつた
うたをうたいながらあつちへいつてしまつた
そのささやかな人形のおもみがうれしくて
はらばいになつたまま

胸をふくらませてみたりつぼめたりしていた

美しくあるく

こどもが

せつせつ　せつせつ　とあるく

すこしきたならしくあるく

そのくせ

ときどきちらつとつづくしくなる

悲しみ

かなしみと

わたしと

足をからませて たどたとゆく

草をむしる

草をむしれば

あたりが かるくなってくる

わたしが

草をむしっているだけになってくる

童

ちいさい童が

むこうをむいてとんでゆく

たもとを両手でひろげて かけてゆく

みていたらば

わくわくと たまらなくなってきた

雨の日

雨が すきか

わたしはすきだ

うたを うたおう

蟻

蟻のごとく

ふわふわふわ とゆくべきか

おいしいなる蟻はかるくゆく

大山とんぼ

大山とんぼを 知ってるか

くろくて 巨きくて すごいようだ

きよう

昼 ひなか

くやしいことをきいたので

赤んぼを抱いてでたらば

大山とんぼが 路にうかんでた

みし みし とあっちへゆくので

わたしもぐんぐんくつついていった

虫

虫が鳴いてる

いま ないておかなければ

もう駄目だというふうに鳴いてる

しぜんと

涙がさそわれる

あさがお

あさがおを 見

死をおもい

はかなきことをおもい

萩

萩がすきか

わたしはすきだ

持って 遊ぼうか

西瓜を喰おう

西瓜をくおう

西瓜のことをかかんがえると

そこだけ明るく 光ったようにおもわれる

はやく 喰おう

こうじん虫

ふと

とつて 投げた

こうじんむしをみていたらば

そのせなかは青く

はかないきもちになつてしまつた

春

桃子

お父ちゃんはね

早く快くなつてお前と遊びたいよ

春

雀をみていると

私は雀になりたくなつた

陽遊

さすがにもう春だ

気持も

とりとめの無いくらいゆるんできた

でも彼処にふるえながらたちのぼる

陽遊のような我慢しきれぬおもいもある

春

ほんとはよく晴れた朝だ

桃子は窓をあけて首をだし

桃ちゃん いい子 いい子うよ

桃ちゃん いい子 いい子うよつて歌っている

梅

梅を見にきたらば

まだ少ししか咲いていず

こまかい枝がうすす光っていた

冬の夜

おおひどい風

もう子供等はねている

私は吸入器を組み立ててくれる妻のほうをみながら
ほんとに早く快くなりたいと思つた

病気

からだが悪いので

自分のまわりが

ぐるっと薄くなつたようであまりなく

桃子をそばへ呼んで話しをしていた

太陽

目をまともに見ているだけで

うれしいと思つているときがある

石

ながい間からだが悪く

うつむいて歩いてきたら

夕陽につつまれたひとつの小石がころがっていた

春

原へねころがり

なんにもない空を見ていた

春

朝眼を醒まして

自分のからだの弱いこと

妻のこと子供達の行末のことをかんがえ

ぼろぼろ涙が出てとまらなかつた

春

黒い犬が

のっそり縁側のところへ来て私を見ている

桜

綺麗な桜の花をみていると

そのひとすじの気持ちにうたれる

神の道

自分が

この着物さえも脱いで

乞食のようになって

神の道にしたがわなくてもよいのか
かんがえの末は必ずここへくる

冬

悲しく投げやりな気持でいると

ものに驚かない

冬をうつくしいとだけおもっている

冬日

冬の日はうすいけれど

明るく

涙も出なくなってしまう私をいたわってくれる

森

日がひかりはじめたとき

森のなかをみていたらば

森の中に祭のように人をすいよせるものをかんじた

夕焼

あの夕焼のしたに

妻や桃子たちも待つているだろうと

明るんだ道をたのしく帰ってきた

霜

地はうつくしい気持をはりきって耐らえていた

その気持を草にも花にも吐けなかつた
とうとう肉をみせるようにはげしい霜をだした

冬

葉は赤くなり

うつくしさに耐えず落ちてしまった

地はつめたくなり

霜をだして死ぬまいとしている

日をゆびさしたい

うすら陽の空をみれば

日のところがあかるんでいる

その日をゆびさしたくなる

心はむなしく日をゆびさしたくなる

雨

窓をあけて雨をみていると

なんにも要らないから

こうしておだやかなきもちでいたいとおもう

くろずんだ木

くろずんだ木をみあげると

むこうではわたしをみおろしている

おまえはまた懐手しているのかと調べてみおろしている

障子

あかるい秋がやってきた
しずかな障子のそばへすりよつて
おとなしい子供のよう
じつとあたりのけはいをたのしんでいたい

桐の木

桐の木がすきか
わたしはすきだ

桐の木んどこへいこうか

ひかる人

私をぬぐうてしまい

そこのとこへひかるような人をたたせたい

木

はつきりと

もう秋だなどおもうころは

色色なものが好きになつてくる

あかるい日なぞ

大きな木のそばへ行つていたいきがする

お化け

冬は

夜になると

うつすらした気持になる

お化けでも出そうな気がしてくる

踊

冬になって

こんな静かな日はめったにない

桃子をつれて出たらば

櫟林のはずれで

子供はひとりでに踊りはじめた

両手をくくれた顎のあたりでまわしながら

毛糸の真紅の頭巾をかぶって首をかしげ

しきりにひよこんひよこんやっている

ふくらんで着こんだ着物に染めてある

鳳凰の赤い模様があかるい

きつく死をみつめた私のこころは

桃子がおどるのを見てうれしかった

素朴な琴

この明るさのなかへ

ひとつの素朴な琴をおけば

秋の美しくしさに耐えかね

琴はしずかに鳴りいだすだろう

響

秋はあかるくなりきつた

この明るさの奥に

しずかな響があるようにおもわれる

霧

霧がみなぎっている

あさ日はあがつたらしい

つつましく心はたかぶってくる

故郷

心のくらい日に

ふるさとは祭のようにあかるんでおもわれる

こども

丘があつて

はたけが あつて

ほそい木が

ひよろひよろつと まばらにはえてる

まるいような

春の ひるすぎ

きたないこどもが

くりくりと

めだまをむいて こつちをみてる

豚

この 豚だつて

かわいいよ

こんな 春だもの

いいけしきをすつて

むちゆうで あるいてきたんだもの

犬

もじやもじやの 犬が

桃子の

うんこを くつてしまった

柿の葉

柿の葉は うれしい

死んでもいいといつてゐるふうな

みずからを無みする

その ようすがいい

涙

めを つぶれば

あつい

なみだがでる

雲

あの 雲は くも

あのまつばやしも くも

あすこいらの

ひとびとも

雲であればいいなあ

お錢

さびしいから

お錢を いじくつてる

水や草は いい方方である

はつ夏の

さむいひかげに田圃がある

そのまわりに

ちさい ながれがある

草が 水のそばにはえてる

みいんな いいかたがたばかりだ

わたしみたいなのは

顔がなくなるようなきがした

天

天というのは

あたまのうえの

みえる あれだ

神さまが

おいでなさるなら あすこだ

ほかにはいない

秋のひかり

ひかりがこぼれてくる

秋のひかりは地におちてひろがる

このひかりのなかで遊ぼう

月

月にてらされると

ひとりでに遊びたくなってくる

そつと涙をながしたり

にこにこしたりしておどりたくなる

かなしみ

かなしみを乳房のようにまさぐり

かなしみをはなれたら死のうとしている

ふるさとの川

ふるさとの川よ

ふるさとの川よ

よい音をたててながれているだろう

ふるさとの山

ふるさとの山をむねにうつし

ゆうぐれをたのしむ

顔

どこかに

本当に気にいった顔はないのか

その顔をすたすたと通りぬければ

じつにいい世界があるような気がする

夕焼

いま日が落ちて

赤い雲がちらばっている

桃子と往還のところでないこと見ていた

冬の夜

皆が遊ぶような気持でつきあえたら

そいつが一番たのしかろうとおもえたのが気にいって
火鉢の灰を均らしてみた

麗日

桃子

また外へ出て

赤い茨の実をとって来ようか

冬

ながいこと考えこんで

きれいに諦めてしまつて外へ出たら

夕方ちかい樺色の空が

つめたくはりつめた

雲の間に見えてほんとにうれしかった

冬の野

死ぬことばかり考えているせいだろうか

枯れた茅のかげに

赤いようなものを見たとおもつた

病床無題

人を殺すような詩はないか

無題

息吹き返させる詩はないか

無題

ナーニ 死ぬものかと

児の髪の毛をなげてやった

無題

赤いシドメのそばへ
によろによろと

青大将を考えてみな

梅

眼がさめたように

梅にも梅自身の気持がわかって来て

そう思っているうちに花が咲いたのだろう

そして

寒い朝霜ができるように

梅自からの気持がそのまま香にもなるのだろう

雨

雨は土をうるおしてゆく
雨というもののそばにしやがんで
雨のすることをみていたい

木枯

風はひゅうひゅう吹いて来て
どこかで静まってしまふ

無題

雪がふついているとき
木の根元をみたら

面白い小人がふざけているような気がする

無題

神様 あなたに会いたくなくなった

無題

夢の中の自分の顔と言うものを始めて見た

発熱がいく日もつづいた夜

私はキリストを念じてねむった

一つの顔があらわれた

それはもちろん

現在の私の顔でもなく

幼ない時の自分の顔でもなく

いつも心にえがいている

最も気高い天使の顔でもなかった

それよりもっとすぐれた顔であった

その顔が自分の顔であるということはおのずから分った

顔のまわりは金色をおびた暗黒であった

翌朝眼がさめたとき

別段熱は下つていなかった

しかし不思議に私の心は平らかだった

青空文庫情報

底本：『八木重吉詩集』 白鳳社

入力：j.ujiyama

校正：丹羽倫子

1998年8月20日公開

1999年8月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです

貧しき信徒

八木重吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>